



嬉泉の新聞 第51号 2003年(平成15年)3月発行(年3回発行)

発行所=社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156-0055) TEL 03-3426-2323

<http://www.kisenfukushi.com> E-mail:kisen@kisenfukushi.com

発行人=石井哲夫 編集人=小山裕子

「夢と希望を形にして」

藍工房 施設長 竹ノ内 瞳子

する20歳の横沢尚子さんの運転で走り廻っていた時のこと、今でもはっきり憶えています。辞書を頼りにジーン・レリーさんと各銀行に借入れをお願いして廻ったこと。スプーン、皿、ベッド etc、生活用品をご近所から貸していたいたこと。オレゴン州、ワシントン州の名所観光にドライバーとして協力して下さった方々。ベッドメーキングやオープン料理の講師をボランティアでご近所の方々が支えて下さってスタートし15年経った現在、5~10分で集まれる理事の皆様のもと、藍染教室のクラスもニューヨーク・アラスカ・ロサンゼルスと、遠方からも藍工房USAのファンが集まっています。

今年1月の知事障害の保護者会で「嬉泉の石井啓氏に法人化準備委員になっていただき、良き縁が結べて、いろいろご指導いただけることになりました。」と話したら、ある方が「私の息子(H. M)も嬉泉さんに大変お世話になりました」と顔をほころばせて話してくれました。このH. Mさんとは青鳥養護学校卒業後、6ヶ月一緒にアメリカで生活を共にしました。オレゴンの海で流木に二人腰かけ、ぼんやり打ち寄せる波を見ていたら、「(世田谷の) 経堂はどうち」「～さんがそこに住んでいる」「23才で結婚したい」と話してくれました。石のように固く、奇声と自傷の表現しかなかった彼が一人の青年として大島紬の織りにいそしみ、ジョブコーチと共にロイヤルホストに働き、このように自己表現が広がっていました。

これからも、彼らの夢や希望を聞かせていただけるような私でありたいものです。

1981年は、国際障害者年にあたる年でした。福祉を学ばせて頂いている柏朋会(会長寛人親王殿下)の例会で、身体に重度の障害を持つ一人の女性から、「就職したいがとてもむづかしい」「仕事がしたい」「仕事場が欲しい」との発言があり、それが私の心をとらえ、1983年6月1日、発言者の小高恵子さんと現藍ハウス(自主運営グループホーム)の6帖1間から二人で歩き始めました。「仕事を持って世界へ出よう」「ゆるぎないものを持とう」全くの無から藍を選び、学び、彼女の夢と希望を確実に形にして歩いてきました。

二年後、ニューヨーク・カーネギーホールの舞台衣装製作依頼の仕事があり、障害の異なる三人の人たちが衣装を作り、その晴れの舞台も製作者と一緒に見て感動を分かち合ったのが世界への発表の第一歩でもありました。藍工房に集まって来る障害を持つ方々の夢を、ひとつひとつ実現化して歩いて、それが藍工房グループの道になりつつある今日です。その夢や希望は、小さなものから大きなものまでテーマは様々です。時として「ウーン」とうなるような課題も起こって来ましたが、それもまた楽しい努力目標もありました。ワクワク、ドキドキ、ハラハラの日々の連続。綱渡りの資金・運営。その最たるもののが藍工房USAです。15年前私達10名(障害者5名、ボランティア5名)がアメリカ西海岸、ワシントン州、バンクーバ市にある「ツー・オー・ファイブ(205)」というモーテルに泊まりこみ、来る日も来る日も、私達の家を買うために、スタッフとしてアメリカで勤務

社会福祉基盤論

石井 哲夫

- その14 -

支援費のことを考える(その三)

今、支援費制度のことではつきりしてきたことは、利用者中心といふ社会福祉基礎構造改革の実現を促進しなければならないと言うことである。

本来、利用者中心といふ言葉は、臨床的な立場から発せられる言葉であるはずだが、行政的な立場から使われるようになってきたことに、快哉の気持ちを持ちながらも実現過程に不安を覚えるのである。最近の障害者福祉施設に関して、トラブルが発生していることも、その一例である。それは、支援費制度に関する情報を探つて生じた。来年度の福祉関係予算のなかで、ホームヘルパーの使用制限が行われるという情報が、新聞報道で流れしたことからであった。そのことで、厚生労働者の一階のホールは障害者の陳情の

波が溢れんばかりとなつた。障害福祉課長の説明によれば、決して個人のヘルパー使用の上限を定めてはいない、というものであったが、こうした新聞報道から、各障害団体が行動を起こしていく、という事実を目の前にした行政の人たちは、定めし驚いたことであろう。

日本自閉症協会も行動を起こしている。その理由は、自閉症のよな社会的な自立が大きく遅れている人たちの地域・家庭生活の自立を可能とするためには、多くのホームヘルパーの援助が必要である。ホームヘルパーの援助が必要であること、施設生活にかかる人件費とは遙かに比較にならない膨大な量となることが推測される。親たちは、施設生活から分離された地域生活を、という国の大意を半信半疑ながら信じようとしてきた。そのような時期に、誰からどういう形でこのような情報が生じてきたか、

その情報の根拠は不明であるが、障害者団体も障害者の親の会としても、その真偽を直接行政当局から確かめようとする、と言うくらいいの重要な事態という判断があつたのである。

障害者やその家族、さらに、われわれ利用者のために仕事をしてきたものは、他の省庁とは異なつて、厚生労働省は味方と信じていったからであった。

話を戻して、社会福祉基礎構造改革の道を考えてみると、それが険しいだけに拙速はさるべきである。ホームヘルプサービスだけが、障害者の自立生活の支援にないものではなく、グループホーム

や、少人数の施設生活が必要な場合もあるので、地域生活の再構造化を行うためにいろいろな試行錯誤の過程を経る必要があると思つてゐる。これは理想論ではなく現

実的に国民の納得の上に立つものであると考えるからである。

私としては、やはり障害者の地

域生活展開のために、まず、施設の地域化から取り組むことが、

利用者としての本人やその家族の意に沿うものと思っているのだが、

一般国民はどう考えているのであ

る。

そして自治体や施設経営者に、地域に質の高い支援システムを作ることを先決である。安価な地域サービスは、あくまでもボランタリーナ試験的な域から脱していく努力をさせていく方法を考えることを、本人や親や、施設現場のものにはよくわかっているのである。われわれは、国民の代わりに障害者の福祉に関わる仕事をしてい、それは厚生労働省と共にあらうという感覚であつたはずである。かつて、親しく語り合えた厚生労働省のOBの人たちは、民間社会福祉の内容を現実的に認識し、我々との話し合いの中から施策を実行してもらえたと思っていて。それが、次第に語り合う機会も少なくなつていて、ものと感じている。これからは、この信頼関係を回復し、共に社会福祉構造改革の進め方に合意しなければならないと思って

はじめに
平成15年1月に「東京都自閉症・発達障害支援センター」(Tokyo Support Center for Autism & developmental disorders = 略称 TOSCA トスカ)を、社会福祉法人嬉泉が東京都の委託を受け、事業を開始はじめた。

この事業は、「知的障害児者の教育や福祉の枠組みに自閉症が取り込まれているこれまでの状況を変えていきたい」「自閉症に特化された教育や福祉を制度として作って欲しい。行政として認めて欲しい」「現在の幼児期・学童期・等の横断的なその時々の支援体制ではなく、幼児期から成人期にわたるまでの長いスパンでの支援の体制が欲しい」などの、保護者や関係者の長く熱い思いが「自閉症・

- * 本人の地域社会への関わり方
- * 移行

おわりに

自閉症・発達障害児者の、「それぞれの人の人生」という長いス

東京都自閉症・ 発達障害支援センター

発達障害支援センターとして実を結んだものである。

法人嬉泉としても、センター長に常務理事石井哲夫が自ら任につき、法人をあげてこの事業に取り組む考え方である。

センター事業の内容

このセンターに求められている、「相談支援」「療育支援」「就労支援(地域社会参加支援)」「啓蒙活動」の概要を簡単に以下に記すと、

課題として

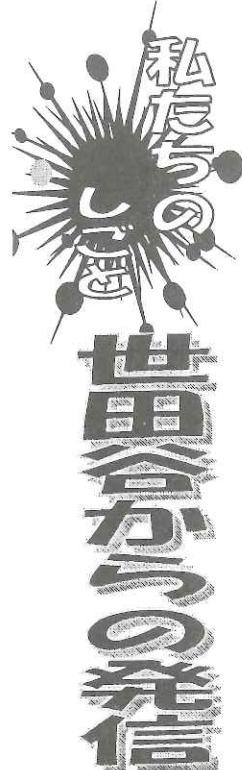
このようないわゆる「東京」には、職員配置の4名だけで、120万都市の東京をカバーしていくには限りがある。「東京」には、色々な支援の行政システムや福祉資源、専門機関があるが、それぞれが独自に活動をしており、その

立てるための具体的な手立てをつかみ、個別援助計画の作成後、家庭支援・所属集団支援・関係機関による支援への

(支援スタッフ小山裕子)



東京都自閉症・発達障害支援センター
実施場所：世田谷区船橋1-30-9
連絡先：03-3426-2318（専用電話）



るソーシャル・スキル・トレーニングの計画設計とその実行に必要な援助や支援 * 本人所属機関・関係機関とのコンサルテーション * 必要とされる公的・社会資源の情報提供

等である。これらのこととは、すでに社会福祉法人嬉泉が、「ひとりの人としての自閉症児者の人生にわたる支援」と「その家族への支援」を40年近くってきたことであり、その経験の集積をこのセンターで生かしたいと思っている。

この使命が果たしていけるように、色々な支援やご援助を今後とも切にお願いしたい。

(支援スタッフ小山裕子)

成人を祝う会

稲嶺 裕子

平成15年1月10日に「平成14年度赤塚福祉園 成人を祝う会」が行されました。今年度は更正施設の二名の利用者さんが成人を迎えるされました。

準備の段階から、「会の主役の二人の利用者さんが、それぞれ手応えが持てるような式にしたい」ということを一番の目標にして準備をしていきました。そして、一人の方にはお祝いのくす玉を割って頂くことになり、もう一人の方には『今後の抱負』というテーマで挨拶をして頂くことになりました。

くす玉を担当した方は、本番でくす玉だけでなく素敵な袴姿を列入席された方々に披露してくれました（係としては、くす玉が無事に開いたので、ほっとしました）。また、挨拶を担当した方は、とても緊張していましたが、立派に大任を果たしてくれました。また、新しく成人を迎えるられた方への花束や記念品の贈呈や、お祝いの挨拶を担当してくれた先輩の利用者さんもそれぞれ、頑張つて役割を果たしてくれました。

また今回も、様々な方のご厚意に支えられた会となりました。プロ・ピアニストの巨勢典子さんがボランティアでお祝いの演奏をして下さったり、愛媛県岩城村から記念植樹用にレモンの木を寄贈して頂いたりしました。『成人を祝う会』は園内の行事ではあります

「私たちの事務局」の仕事について
（袖ヶ浦のびろ学園　井芹 浩美）

袖ヶ浦の「事務局」で仕事をするようになって、早いもので二年が経ちます。電話の対応、書類の作成等に加え、いろいろな仕事が舞い込んでくるので、いそがしい日が続いています。「○○さんいませんか」「○○ありませんか」などといった質問をはじめ、袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園及び法人全体のことを把握していないと対応できないこと（質問）もあるので、最初は右往左往の連続でした。受付を含む「事務局」は、来客見学、保護者、実習生、業者、職員など多くの方が利用します。わざ、袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園の「窓口」になっているので、

「事務局」の仕事について

井芹 浩美

そこで学園のイメージが決まってしまうかもしれません。特に外来者との対応は、常に緊張しています（今は少し慣れましたが…）。

（袖ヶ浦ひかりの学園職員）
「はい、袖ヶ浦のびろ学園、井芹でございます」

私は、二十八年間大工をしてきましたが、妹が育心会で働いていたことがきっかけで、袖ヶ浦のびろ学園に再就職することになりました。

「営繕」を通して

若林 和吉

（袖ヶ浦のびろ学園職員）
まだ、わからないことだらけですが、自分の技術が学園で生きられ、間接的にせよ利用者の生活が少しでも快適になればと思っています。

強：等が必要です。毎日忙しく仕事を追われています。そんな中、同期に就職した高橋松司さんは、いろいろな資格を持っているのでとても頼りにしています。
加えて、日々の日誌や営繕にもなう書類の作成など（大工時代には経験しなかったこと）も慣れていないので、事務局と相談して作成しています。

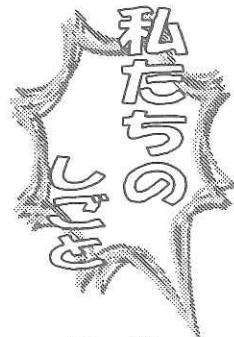


就職後、仕事の内容が一転しました。施設の電気、水道、鍵、設備等、営繕に不慣れなことが多く、戸惑っています。鍵の修理依頼など、ドアノブの仕組みから調べなくてはならないことがあります。一から勉強することが多いです。

また、袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園の設備は二十年以上の年月が経つておらず、常に部品の交換、修理補



若林さん作・ひかりのプロムナード内の利用者静養室



袖ヶ浦からの発信

嬉泉アピックス

本の紹介

自閉症児の心を育てる

〔その理解と療育〕

本書は、著者が自閉症療育の実践をまとめ出版した、『自閉症児がふえている』（一九七七年三月書房）を改訂したものである。36年前の当時より著者が搖らがず、主張し続けてきた「『自閉症』という障害はあっても、自閉症児

者を「人の『人』」としてとらえ、「その心を育てる」という視点での自閉症児者への療育理念は、現在各方面でスローガンとなっていきる『本人主体の福祉、心のケア』等のベースになる考え方である。

また、筆者が主張してきた「受容的交流理論」の、「自閉症児者の内的世界や心理状態を理解し、防衛をといでいく『受容的段階』」の上に、援助者からその自閉症児

お求め先
… 全国の書店。
お問い合わせ先
… 子どもの生活研究所
子どもの生活研究所

03.3426.2323



待ちに待った
ブルーアロー号

主に相手が泣かず笑うの学園が利用
者の送迎に使用している「バス」
の老朽化にともない、ホームペー
ジに「バスを譲ってください」と
掲示したところ、後援会長の前川
長慶さんより、バスを寄贈してい
ただくことになりました。ホーム
ページを見た前川さんが中古車販
売の会社を調べて見つけていただき
ました:ということでした。加えて
バスの全面改装、「袖ヶ浦ひかり
の学園」の文字も入れていただき
ました。本当にありがとうございます。
また、バスの名前は『ブルーリー
アロード』と名付けられ昨年の十一
月から運行を開始しています。利
用者が颯爽と乗り込む姿を見て、
職員一同非常に感謝しています。

自閉症治療教育実践講座
(2月7日・8日)

お題其ノ五

『支援費制度』

事務局長 石井 啓

は懸念される点があります。

一つは、福祉サービスの受給に係る責任が、行政責任から利用者責任になるということです。措置制度の最大の特徴は、福祉サービス提供のすべてにおいて責任を行政が負っているということです。これが利用制度になると、サービスの選択、実施はすべて利用者の責任になるということです。利用者が「サービスを選択する権利」が保障されるためには、ニーズに基づいた充分なサービス供給基盤の確保と共に、それぞれのサービスが正しく機能しているかどうかを監督する必要があります。ところがサービス選択については明確になつたものの、サービス供給基盤整備が市場原理に委ねられたり、監督責任の所在が今ひとつ明確でなかつたりなどの問題があると思われます。

A 壱・支援費制度は簡単に言えば、措置制度のアンチテーゼとして考えられたもので、現行の措置制度が福祉サービスを必要とする人に対して行政（都道府県や市町村）が行政処分によりサービス内容を決定する仕組みであるのに対して、障害者等のノーマライゼーションと自己決定の実現を目指して、利用者が事業者と対等な関係に基づきサービスを選択する利用制度であるとされていますが、現時点で大きく分けて三点ほど、課題もしくは懸念される点があります。

二つめは、福祉サービスの支給内容と支給量を市町村の福祉事務所が判断し支援費の金額を決定す



るという方式になるということです。各市町村の判断ということは、社会参加やノーマライゼーションの概念をそれぞれがどのように捉えているかということや、各担当者の考え方あるいは予算枠の問題などで、相当なばらつきができることが予想されます。ということは、結果的に市町村格差を認め、全国的な底上げにもならず、下手をすればサービスの低下につながる恐れもあります。

三つめは、支援費支給方式といながら、サービスにかかる費用の助成金は利用者に直接支払われるのではなく、事業者に対して支払われることです。これは、建前としては利用者に直接支給する方式も選べるもので、手続きの煩雑さを避けるために代理受領方式となつたと言われていますが、そうであるならば、バウチャー方式を導入するなどして利用者の当事者意識と権利意識を高めることこそ利用者主体のサービスであると思われます。

このように、高い理念に基づいた支援費制度ですが、導入を前にして利用者と事業者の双方に、多く不安があるのが現状です。（終）

編集後記

「東京都自閉症・発達障害支援センター」を受託後、色々な方との話の中で、「大都市を4名でやるんじゃ大変ですね」「嬉泉さんがやるんだから良いセンターのモデルになるように頑張ってください」「初めのセンターの実績いかんで、東京に「つめ・三つめのセンターができるかどうか、かかっている」というような、励ましやら期待がこめられた声掛けを頂く。正直なところ、今はそれらの言葉がプレッシャーに感じられる現状である。ともかく立ちすくんで手を挙げていてもしょうがない、できることから手をつけていく。

一法人の力だけではなく、「自閉症という生きにくい障害を持つ人たちが、少しでもその人らしく豊かに暮らしていくようになりたい・考え・実践している色々な立場の方々」と、情報や人脈や智恵やよい実践の経験などを持ち寄り力を合わせていく、そういうオーブンな「東京都自閉症・発達障害支援センター」にしていこう、それが目標である。

2003年の希望

市川 浩志

今はピカデリーで仕事していく、いつも一万五千円から二万五千円ぐらい給料をもらつて、今度外にたらきに出で給料もらいたい！学園の給料と外での給料とこうごにもらいたいのです。今度からは九州旅行何回も行きたいと思い、一年に三回は行きたいと思つている。

『つづきの家の生活について』

今つづきで生活している。自分ことは自分でやっている。今のお金の管理も自分のせんたくをしている。それで朝7時におきて、8時前からピカデリーで仕事をしている。いつも月曜日は来園前から、土曜日は帰宅の後までピカデリーで仕事をしている。そうして午前は一週間全部仕事をしている。午後はアウトスの時もあればピカ



「ハリセンボンアラジン」
アトリエ・アウトス 市川浩志画

デリーの時もある。外食は水曜日の5時半から夜の8時まで行つている。夕方の外出が一番楽しいです！ 終わり。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

ひかりのタイムス

独立第45号

ソコンを買わないか」という提案があり、パソコンを学園のインターネットで注文した。私自身も春のひかりが開設された時はインターネットをやりたいと希望を学園側に出したが、「裕は、はまるからなあ」という答えで一蹴された。それでもパソコンをやりたい気持はくすぶつてた。IT、ITと日本中がブームに沸いたころ、私がスーパーで打つパソコンは旧式のデスクトップ。最新式のデスクトップパソコンは、たまに触つても1回きりでおわった。

スーパーの仕事を辞めて引きこもつていた私に「パソコンを買わなきか」の提案は新しい世界が開ける気がした。

パソコンの注文は学園のインターネットで注文した。「エッジ」というインターネット機器の接続、機械の組み立て、細かい手続き、電話会社との契約は職員がやった。メールをバカバカやりだすと請求が2万、3万と電話会社から來た。これじゃ高いので、8月中旬にかけ「放題コース」に設定した台の請求にとどまり、今にいたつ

字で変換する。変換ミスが起きる。例えば「は」を「葉」で打つなど、変換ミスがあとをたたない。それでもメールを打つと、変換ミスの字が人に指摘される。それを直そうとするが、早く打つため、変換ミスが起きる。そのままBBS投稿、メール送信、ミスがなくならない。まだ指がパソコンになれていないせいもある。

助詞でミスが起きるのは、ある自閉症者で本書いたメル友氏によると、パソコンは欧米人仕様で作っていて、ひらがな、カタカナ、漢字という文字表現が多様な日本語設定にあわせていないからとう。

この苦労は続く。

(次号につづく)

(グループホーム・春のひかり支局長)

『きっかけ』
春のひかり担当の職員から「パ

『助詞の変換の難しさ』

私はながらくワープロをやっていた。ワープロは助詞の変換なしに打てる。ところがパソコンは違う。カタカナ、ひらがな、漢字の度に変換を必要とする。そのためメールやBBSに投稿するとき、ひらがなで打つべきところを、漢